

# 本文章已註冊DOI數位物件識別碼

## ▶ リヴァイヤサン（Leviathan）雜考

doi:10.29714/TKJJ.200806.0008

淡江日本論叢, (17), 2008

作者/Author：齋藤司良

頁數/Page：133-142

出版日期/Publication Date：2008/06

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200806.0008>



*DOI Enhanced*

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



## リヴァイヤサン（Leviathan）雑考

淡江大学日文系 齋藤司良

今年も、さる11月18日、日本の調査捕鯨船が下関港から南極海に向かったが、それを報じる新聞記事は少なく、小さかった。

しかし、国内ではほとんど報じられなかった捕鯨船の出航が、世界では大きく報じられ、反発を招いていた。とくに11月24日に総選挙がおこなわれたオーストラリアでは、政治やマスコミを巻き込む騒ぎに発展していた。

その背景には、日本の20年以上におよぶ調査捕鯨に対する鯨保護団体の反対運動と、今回の調査捕鯨の対象にオーストラリアでのホエール・ウォッチングの愛好家の多いザトウクジラが新たに加わったためでもある。

オーストラリアでの総選挙は、11年ぶりの政権奪取を目指す野党・労働党の「影の内閣」の外相を務めるマクラレン氏の「監視の必要があれば、軍を派遣して追跡する」との強行発言もあってか、もちろん10年に及ぶハワード長期政権と対米追随外交等々によつてか、政権交代が実現した。

日本の調査捕鯨には常に批判がつきまどってきた。そして、対話の場としてのIWC（国際捕鯨委員会）での日本を始めとした捕鯨国に対する批判は、何世紀にも亘って捕鯨を自らの生活の糧としてきた歴史的背景を理解することもなく、また、反捕鯨国の多くが19世紀から20世紀にかけての西欧の近代機械産業の発展・展開に、大型鯨類の鯨油が機械油などの油脂製品資源として大量に消費されてきたという自らの歴史を忘れ、今日では多分に鯨肉を食べる国に対しての文化の問題として屈曲されてきているのが事実でもある。

さて、この雑感のテーマである『リヴァイヤサン（Leviathan）』とは、17世紀のイギリスを代表する政治哲学者ホッブズの主著の名である。

そして、リヴァイヤサン（Leviathan）とは、『旧約聖書』の「ヨブ記」の41章に出てくる怪獣の名前であり、神を除いて、この地上において最強なるものを象徴した言葉である。

今日でも、日本の高等学校の政治の教科書にも必ず見ることのできる、王冠をつけた巨大な国王の身体が、無数の小さな国民によって形成されている図が、

この書物の趣旨を象徴しているそれである。

すなわち、ホッブズによれば、その最強なるものとは、人々がその生命を守るために契約を結んで設立した政治共同体＝コモンウェルス（国家）を意味した。また、このリヴァイヤサン（Leviathan）は海の怪獣、しかも平和の怪獣であった。そこには、ピューリタン革命という悲惨な政治状況を顧みて、いかにしてこの国家が、人間の自由や生命の安全と平和を保障できる平和で統一的な政治社会を確立できるかを考えた、近代的社会契約思想の原型であった。

しかし、現今の世界に垣間見れるのは、欧米諸国をその価値基準の中心とした、所謂「グローバリゼーション」であり、「グローバル・スタンダード」ではなかっただろうか。われわれは2001年から21世紀に足を踏み入れて7年になる。

エンゲルスの言葉を借りれば、「グローバリゼーションという妖怪（リヴァイヤサン・Leviathan）が世界を徘徊している」ことになろうか。

「グローバリゼーション」といい、「グローバル・スタンダード」という市場原理を振りかざす自由競争は、17世紀にホッブズが指摘した、自由な競争に社会をまかせれば、強者が勝ち続け弱者が負け続ける、弱肉強食の世界になる、と。けだものの世界は自由競争の世界でも有る。

現に今の「ニート」と称される、若年層のフリーアルバイターの出現が日本でも問題になっている所である。

この、21世紀の経済に見られる自由競争の「グローバリゼーションという妖怪（リヴァイヤサン・Leviathan）が世界を徘徊している」価値基準と、捕鯨活動というその国の文化に根ざした価値基準とは、同一に論じることには無理がある。

文化とは、価値観の問題である。コーラン（クラン）を焼かれて怒り狂うイスラム文化圏の人たちの気持ちがわからないのは、西欧世界の人たちがコーランというものに価値をおいていないからである。西欧世界の人々が牛や山羊の肉を食べてきたように、生きる手段として、日本人は鯨を食べてきたのである。

それは、古来からの仏教の戒律である殺生禁断という価値観によって、五畜（犬・牛・馬・猿・鶏）の肉食を憚ってきたからであった。それがために、時

には猪（イノシシ）を称して「山鯨」といって食した。

日本人は鯨を食べてきた。一頭の鯨から、肉を得てエネルギーをとり、皮、鬚は万能の代物として使用し、捨てるものはないほどに使い切った。それが自然から授かった命に対しての、せめてもの償いであった。動植物を狩り、食するのは食物連鎖の頂点に立つ人間が、生きていく手段として選んだものである。何を狩り、何を食べるか、それが文化であり、価値観である。

ヨーロッパでの捕鯨の歴史も古く、すでに9世紀頃からスペインとフランスの国境にまたがるピレネー山脈西部に暮らすバスク地方の人々によって、ビスケー湾において捕鯨が行われていた。かれらの捕鯨活動は16世紀まで続けられ、17世紀には入ると、イギリスやオランダがその主役となると同時に、世界は大航海時代へと入っていった。

17世紀から18世紀にかけての時代になると、アメリカ大陸東部のニューイングランド地方でも、ヨーロッパから移住してきた植民者たちによって盛んに捕鯨活動が行われるようになっていった。もちろんアメリカ大陸における最初の鯨取りは先住民のインディアンであったが、やがてその技術と植民者の資本が結びついていった。

植民地アメリカでの捕鯨業は、1667年にロングアイランドのサウスハンプトンで始まり、ついで1688年にケープ・コッド、1690年からナンタケットが加わっていった。

ナンタケットの捕鯨業は、アメリカ革命（1774－1783）直前には最盛期に達し、当時は150隻の捕鯨船を所有していたと言う。そして対岸のニュー・ベットフォードを建設して、鯨脳油と鯨油の本土への輸入港とし、またこの町を捕鯨の基地として発展させていった。

アメリカの海洋小説『白鯨』で知られるハーマン・メルヴィルは、1841（天保12）年1月3日、捕鯨船「アーク・シュネット」号、船長の名はバレンタイン・ピース、に乗ってマサチューセッツ州フェアヘヴンの港から、19歳になったメルヴィルは大西洋・ホーン岬・太平洋へと海の「リヴァイヤサン・Leviathan」（抹香鯨）を求めての旅に出航していった。

16世紀、17世紀の西洋諸国の遠洋航海技術はしだいに向上し、いわゆる

大航海時代を出現させ、18世紀になるとイギリスやフランスの探検隊がマゼラン海峡を経由して太平洋に入り、ときに日本人のいっさい関知しないあいだに日本列島を一周するというようなことまでしていた。

さらに、18世紀の後半にはいるとアメリカの捕鯨業が活況を呈してきた。それは、抹香鯨の頭部からとれる鯨蠟が、万能薬として重んじられ、「抹香油一升金一升」の価値があるとされていた。

1790年になると、イギリスのエンダービー商会の「アメリア」号がホーン岬を周って太平洋へ入り、抹香油を船倉に満載して帰ってきた。乗り組んでいた鯨取りの多くは、ナンタケットの出身者であった。翌1791年にはナンタケットの「ビーバー」号、ニューベッドフォードの「レベッカ」号など6隻が、ホーン岬を迂回して太平洋で多大な抹香油を収穫して帰港した。この時以降、アメリカの捕鯨船の太平洋での活動は津波のように起こった。

1818年、ナンタケット船籍の「グローブ」号がホーン岬を回り赤道を西航し、太平洋の中心域に出て、抹香鯨の群れを追いかけていた。これがいわゆる遠海漁場の始まりであった。ついで、1819年、ナンタケットは32隻の捕鯨船を送り出した。しかし、6隻が母港に帰らなかった。そのうちの一隻の名は「エセックス」号である、「エセックス」号は、1819年8月12日ナンタケットを出航してホーン岬回りで太平洋へ入った。ガラパゴス諸島に立ち寄ったあと、赤道に沿って西へ進んだ。そして、南緯4度、西経119度の地点に到達したところで、抹香鯨の大群を発見したが、一頭の巨大な抹香鯨（「モチャディク、Mocha Dick」）に襲われて沈んだ。1820年11月2日のことであった。この事件の資料を参考として、1851年にハーマン・メルヴィルが著した小説が、『白鯨』（『Moby-Dick or The Whale』）として、さらには彼自身の捕鯨船で抹香鯨を追いかけた経験を元にして実を結んだ。

ちょうどその頃、ナンタケットに、マサチューセッツ州ブライトン出身のジョナサン・ウインシップという船長から、太平洋を航行中に日本近海でおびただしい鯨の大群を発見した、との報せがもたらされた。ウインシップ船長は広東貿易に携わり、「オカイン」号の船長として知られていた。彼はまた、1812年にはハワイ王国のカメハメハ一世から白檀貿易の独占権を得ていた。

この報せをきっかけとして、すでに南太平洋漁場に進出していたナンタケッ

トの捕鯨船が北太平洋へ進み、金華山の沖で大漁の抹香鯨を得るいわゆる「ジャパン・グラウンド」の幕開けであった。これを契機としてアメリカ捕鯨船が北東岸の母港から出漁して、北太平洋への捕鯨出漁がブームとなっていたのである。と同時に、この頃より太平洋における日本人の漂流物語が急激に増加するのも、救助する側のアメリカのみならずイギリス、ロシアの捕鯨船や商船による活発な活動がその背景にあった。

ウイシップ船長の情報を確かめるために、ナンタケットから2隻の捕鯨船がハワイのマウイ島に到着した、1819（文政2）年9月17日のことである。この2隻の捕鯨船は、最初にハワイを訪れたアメリカの捕鯨船であったが、日本漁場には向かわなかった。

ジョセフ・アレン船長の「マロー」号は、1819（文政2）10月26日、「バリナー」号の後を追ってナンタケットを出帆し、マウイ島へ至った。翌年5月22日、「マロー」号はマウイを出帆、日本沿岸に到達して、たくさんの抹香鯨を発見した。

この、「マロー」号による日本漁場（ジャパン・グラウンド）の発見のニュースは、北西太平洋を中心とする、海のゴールド・ラッシュを生むこととなった。

アメリカの捕鯨業は、ただナンタケットと東北部地方や、アメリカの経済に大きな役割を果たしていただけではない。アメリカ市民のみならず世界中の人々の生活に欠かすことのできないさまざまな必要を満たしていた。しかし、欧米の捕鯨活動の目的は食ではなかった。

鯨油（鯨蠟）である。日本でもとくに西日本でも灯明用の鯨油生産は盛んであった。アメリカやヨーロッパで鯨油が用いられるのも、むろん明るくするためである。しかし都会の夜を明るくするだけではなかった。

鯨油、とくに抹香油（スパームオイル、sperm oil）は、最上級の灯明用として重んじられ、船舶の安全に欠かせない灯台の照明用油として普く用いられていた。鯨蠟（抹香鯨の頭部からとれる油、spermaceti）は、良質のろうそく材料として、背美鯨からとれる鯨油（whale oil）は、一般の照明や機油として利用された。鯨の髭（whale bone）は縄、コルセット、乗馬用の鞭、傘の骨

airiti

などに加工された。龍涎香 (ambergris) は香水、薬品、そして媚薬として貴重なものであった。

しかし、鯨油の文明が近代の人々にもたらした恩恵はもっと奥深い、より広いものであった。上にも述べたように、鯨油が都会の夜を明るくするだけではなく、人々の頭脳をも明るくするためでもあった。

暗い頭脳を明るく照らすのは読書である。近代ヨーロッパの市民社会とその公共性をパブリック (public) というのは、印刷 (紙と印刷術) された公刊物を媒介とする市民の集合だからである。だがしかし、近代ヨーロッパ社会が原理上、「読書する公衆 (public)」から成り立っているとはいっても、昼の真っ只中からゆったりと本や新聞を読んでいられる人などは限られている。大半は夜、世間の寝静まった時間に読書する人々である。

明るい照明を必要とするのは読む側だけではない。より持続的に安定した照明を必要とするのは著作する側である。北の国の長い夜を、夜な夜なくすぶる鯨油の灯明の下で毎夜書き続ける著作活動の大前提が鯨油のランプであった。

近代社会はむろん、読む人間と書く人間だけから成り立っているわけではない。そもそも読書と著作を取り結ぶものは印刷と出版業である。ペリー来航のニュースを流すメディアは瓦版ですんだかもしれないが、しかし、近代国民国家にあってはもはや瓦版ではありえない。

国民国家は、国土と呼ばれる領土の津々浦々で、国民と呼ばれる人々が国語と呼ばれる言語で同じようなものを読み、同じようなことを考え、同じようなことに一喜一憂する社会である。その大前提はまず、文字を読む訓練を与え、鉛筆で紙の上に文字を書くことのできる人間を育成する学校教育の充実であり、そのためにはまた大量の教科書と大量のノートが必要とされる。このような大量の印刷物を流通させるためには、出版資本主義の成立が欠くことのできない絶対の前提条件であった。しかし、これらは資本があればできるというものでもない。印刷機が円滑に機能するためには潤滑油が必要であり、これに用いられるのがまた鯨油であった。

さらに、鯨油からは先に述べたもの以外に、石鹼ができる。公衆衛生の観念はヨーロッパが誇る新思想であり、かつ伝染病と風土病とを克服して新たなる植民地を広げるヨーロッパ社会の誇るに足る文明の利器でもあった。

airiti

石鹼をつくる過程でグリセリンができる。これにニトロを足せば、ニトログリセリンができる。ダイナマイトがスウェーデンやノルウエーの産物であることは無関係ではなかった。鯨油の軍用価値では、抹香油はアメリカの独立戦争の時期に利用された獣油蠟燭を完全に凌駕していた。そして、それは現代においても弾道ミサイルの燃料としても長くその命脈を保ってきた。

そして、時はまさに蒸気機関万能の時代に入ってきていた。蒸気船であれ、陸蒸気であれ、蒸気で動く鋸であれ、蒸気機関が円滑に回転するためには潤滑油が必要かくべからざるものであった。そして、船舶、機関車、とりわけレールをつくるには鋼鉄を必要とする。鋼鉄をつくるには高炉が必要である。高炉の釜入れには、これまた鯨油が必要である。このように、いわば近代化の装置一切に必要なのが鯨油であり、それを支えたのが捕鯨活動であった。

この時期、世界は海洋の時代に入っている。しかも蒸気船の時代である。ロバート・フルトンの開発した初の蒸気船航路が、ハドソン河に開設されたのは1807年。以後、1819年にサバンナ号による蒸気船の大西洋初横断が行われ、1831年にはアメリカで造った蒸気船「ロイアル・ウィリアム」号は大西洋を渡り、ポルトガルで世界初の蒸気軍艦に採用されている。このようにして、アメリカでは相ついですぐれた航洋蒸気船が生まれていた。

それとともに、時代は鯨に次いで蒸気船が展開し始めていた。

こうした歴史的な必然を、アメリカの捕鯨漁や海事社会とは全く別な視点から、的確に指摘している人物がいた。

汽船の時代が来た。その航路が、経済発展の中心地である米国の東岸から米国太平洋岸（西岸）にのび、やがて太平洋の“対岸”にある中国の主要港・広東につながってゆくという新事態は、近代資本主義世界にとって、・・・アメリカ大陸の発見よりも重大な結果をもたらすだろう。

という分析を、1850年にロンドンで論文として発表しているのである。ロンドンにあって社会主義理論を唱えていたプロイセンの経済学者、カール・マルクスがその人である。



世界の動きの中で、太平洋が蒸気船の航路で結ばれることの重要性。そのことを予見したアメリカ政府と、世紀を動かすこととなる経済学者。

この二つ、鯨油と蒸気船の要因によつて、この時代の開発がもたらす潜在的なエネルギーの大きさとその背景が、充分理解することができる。

そして、漂流・遭難船員の受け渡しという人道主義的な主張をもった捕鯨船と、経済的利益を乗せた蒸気船とが、日本に向けて開国をうながす歴史的な大波に乗って、迫り来ていた。

もしあの二重にかんぬきをかけた国、日本が外国に門戸を開くことがあるとすれば、その功績は捕鯨船にのみ帰せられるべきだろう。事実、日本の開国は目前にせまっている。

と、白い鯨を追って、「アクシュネット」号に乗って、アメリカ最大の捕鯨基地ナンタケットを出港したメルヴィルは、1851（嘉永4）年に出版した『白鯨』によって、日本の開国と、この時期の世界の捕鯨事情と鯨に関する百科全書といっても過言ではない鯨の世界を紹介している。

1843（天保14）年11月8日、アメリカの捕鯨船「マンハッタン」（Manhattan）号は東部海岸を出帆した。行き先はもちろん日本漁場である。そして鯨を追いかけていた1845（弘化2年）3月15日、鳥島で11名の日本人を発見、救助した。それは阿波国の「幸宝丸」の漂流民であった。その翌日、こんどは波間に漂っていた銚子浦の「千寿丸」の漂流民11名を救助した。

彼らを救助した「マンハッタン」（Manhattan）号の船長クーパー（Mercater Cooper）は、「モリソン」号が天保8年6月28日（1837年7月30日）日本へ漂流民を送り届けようとして、幕府の「無二念打ち払い令」によって砲撃にあつて追い返されていたことを知っていたが、幸いにも、天保13（1842）年に出された「薪水給与令」による幕府の政策が緩和されたために、22名の漂流民を無事、送り届けただけでなく、物資の補給や贈り物まで受け取る厚遇にあつた。この政策の緩和・転換は、幕府にもたらされたオランダか

らの情報を幕府が世界の趨勢を機敏に理解しえた結果でもあった。

この出来事を契機として、具体的に云うと、「マンハッタン」(Manhattan)号の船長クーパーが、ペリー提督が日本へ向けて出発する前年の1851年に宛てた手紙が、ペリーをして日本の開国に向かわせる上で大きな役割を果たしていた。その手紙には、

浦賀は安全で近づきやすい港である。私の船は必要な物資はすべて補給できた。

(中略)日本人はもの静かで、友好的で、知的な人々であり、私たちが考えているよりも世界に関する知識を持っている。しかし、長崎以外の港への入港は許されていないから、もしそれを望むならば、力による以外は不可能だろう。

この手紙からは、ひとつの国の「鎖国」という重たい歴史の扉を開いた、不思議な情熱と運命の力を秘めている文脈を感じ取とれる手紙である。

ペリー提督は、それ以前の3回の日本への開国勧告の失敗、即ち第1回目は、1832(天保3)年。ジャクソン大統領の時代に、エドモンド・ロバーツを提督として、戦艦「ピーコック」号を極東に派遣したものであるが、これは日本だけを対象としたものではなく、マスカット(現・アラビア半島オマーン国の首都)のサルタン(太守)や、シャム(現・タイ国)の王との条約締結などでは成果をあげたが、日本へ向かう途中のマカオでロバーツは客死して、その来日の目的を果たすことはなかった。

第2回目は、ペリー出港の6年前の1846(弘化3)年。ポーク大統領が派遣した、ジェームス・ビッドル提督の戦艦「コロンブス」号と「ヴィンセンス」号の艦隊である。

このビッドル使節団は、その前年の1845(弘化2)年に捕鯨船「マンハッタン」号が、22名の日本人漂流・遭難者を送還したとき、日本側の応接が友好的であったことに力を得て派遣されたものであったが、強硬な幕府の態度に大統領親書の受領さえ拒まれるという、屈辱的な扱いを受けて、日本から「追い払われた」のであった。

第3回目は、1851（嘉永四）年6月10日、新鋭蒸気戦艦「サスケハンナ」号と「プリマス」、「サラトガ」号の二隻の帆装船を率いたジョン・オーリック提督である、オーリック艦隊の目的は、遭難船員の保護、日米修好と貿易、貯炭所の建設の三点を盛り込んだ大統領の親書を携えていた。しかし、マカオに着いたところで解任された。

そのオーリック提督の後任として派遣されたのが、ペリー提督である。彼は、前任者たちの開国要求の失敗を研究し、クーパー船長の手紙にも見える「力（パワー）」を蒸気戦艦という「黒船」に載せて、メルビルの言った「二重にかんぬきをかけた国、日本」の開国に成功したのであった。

二百六十年におよぶ江戸の太平の世を、たった四杯の蒸気船で開国させたペリー提督の「砲艦外交」ではあったが、以来、海の彼方の国は現代日本の生存にかかわり続ける最重要国になっている。が、全ての文化的価値と利害が一致するはずはなく、争わず睦まじくするけれども言うべきときには言う、という和して同ぜぬ君子の交わりを胸に、淡江大学日文系のリヴァイヤサンたる名誉教授陳伯陶先生の喜寿の佳節に、先生の益々のご健勝とご活躍を祈念して鯨酔戯言を献じる。